

# 新入生の学生相談室の認知度と学生相談員が授業を担当することとの関連

橋本 和幸<sup>1)</sup>, 小室 安宏<sup>2)</sup>

了徳寺大学・教養部<sup>1)</sup>

福島大学・保健管理センター<sup>2)</sup>

## 要旨

本研究は、学生相談員が授業を担当することが、ある大学の新生が学生相談室や学生相談員をどの程度認知しているのかということに影響するかを検討することを目的とする。2015年の7月に調査を実施した。調査対象者は医療系学科の学生243名であった。結果は、新生たちは学生相談員を、授業を通して知っていた。それ以外では、学生相談室の存在は、大学のアナウンスや教員の紹介で知っていた。しかし、学生相談室の場所までは分かっていなかった。さらに、個々の相談員のことは、授業で出会う以外ではほとんど知る機会がなかった。このため、相談員が様々なアウトリーチ活動を行う余地があるものと考えられる。

キーワード：学生相談室，学生相談員，アウトリーチ，授業担当

## The Relationship Between Freshmen's Degree of Recognition of Student Counseling Office and the Effect of Counselor Taking Charge of the Lecture

Kazuyuki Hashimoto<sup>1)</sup>, Yasuhiro Komuro<sup>2)</sup>

Center for Liberal Arts Education, Ryotokuji University<sup>1)</sup>

Health Care Center, Fukushima University<sup>2)</sup>

## Abstract

The goal of this study is to examine the relationship between freshmen's degree of recognition of the student counseling office and the effect of a counselor taking charge of the lecture. In July of 2015, 243 freshmen in Faculty of Health Science were investigated. The result showed that they knew the students counseling office existed by announcement of the Faculty office or teachers. However, they didn't know where it was. There were few opportunities that the students met counselors. Therefore, it's necessary for counselors to bolster some outreach activities.

Keywords : the student counseling office, taking charge of the lecture, counselor, outreach activities

## I 問題と目的

学生相談室は、学生や教職員による学生生活適応全般の諸問題に関する相談を受けるため、大学内に設置された相談機関である。そして、カウンセラーや兼任の教員が、学生相談員として相談を担当している。学生相談室は、日本学生支援機構がまとめた「大学における学生相談体制の充実方策について」では、学生支援の3階層モデルの中の第3層「専門的學生支援」に位置付けられている。この3階層モデルは、具体的には次のように説明されている（齋藤,2010）<sup>1)</sup>。まず、第1層が「日常的學生支援」で教職員が学習指導や

窓口業務などにおいて自然な形で行う成長支援である。次に、第2層が「制度化された学生支援」でクラス担任や何でも相談窓口などの役割・機能を担った教職員による支援である。最後に第3層が「専門的的学生支援」で、より困難な課題が生じた際に学生相談などの諸機関によって行われる専門的な支援である。このように、学生相談室は、日常的な問題から離れた難しい問題への対応が求められてきた。そのために、相談に来た学生等の安心・安全・安定を確保できる体制を目指して、学内にプライバシーが保護される専用の相談スペースを用意して、そこで来談を待つという方法が採られる場合が多い。しかし、このような対応は、学生相談室が普段学生や教職員の目に触れないということを引き起こした。そして、そもそも学生相談員は専任が少なく、非常勤や兼任が多い（鳥山,2006）<sup>2)</sup> という事情と併せて、学生相談室および学生相談員の存在感を希薄にしているのではないかと思われる。田中（2015）<sup>3)</sup> は、この原因として学生相談員一人あたりの勤務年数が短く、非常勤体制が続いていることを挙げている。そして、学生相談室の存在や役割が知られていないこと、守秘義務や「人に相談すること」への誤解があるとも述べている。さらに、複数のキャンパスがある大学の場合、緊急対応の際だけ別のキャンパスから来た学生相談員が来て指示をすると、学生相談員の役割や人柄に誤解が生じることも指摘している。

上記のような誤解を解消するために、田中（2015）は学生相談室および学生相談員の存在と役割を広く発信することが必要であり、その方法の一つにアウトリーチ活動があるとしている。アウトリーチとは、高岡（2011）<sup>4)</sup> によれば、支援者が対象者のもとに向いて活動を行うことを意味して、支援の前段階として、適切な支援機関やサービスにつなぐものである。例えば、学生相談員が学生や教職員のもとに向いて、学生相談員との関係を作ったり、学生相談室を利用しやすくしたりするようなアプローチ全般を指している。吉武（2010）<sup>5)</sup> は、2000年6月の文部省の報告書「大学における学生生活の充実方策について」の発行後や、2004年の国立大学法人化後に、学生相談員が面接室外の活動も業務の一部とらえて、積極的に行う例が増加したとしている。田中（2015）では、常勤の専任相談員として行っている活動を、内容や対象ごとにいくつものアウトリーチの例が挙げられている（表1参照）が、本研究では、相談員が授業を行うことに注目した。

表1 アウトリーチの一例：学生相談室の年間行事（田中,2015より）

分類	対象	項目
行事	学生	新入生入学時オリエンテーション
		健康診断でのリーフレット配布
		UPIの実施とフィードバック
		心の健康講話
		キャリアガイダンス講話(2年から修士1年まで)
		教職課程学生、ピアチュータへの傾聴スキルトレーニング
	保護者	保護者入学時オリエンテーション
		保護者相談会講話(学園祭時)
	教職員	新1年担任顔合わせ
		学年担任懇話会(1~3年次)
学生対応に関する教職員研修会		
その他	教職員	委員会・連絡会議への出席
		相談室だよりの発行
	学生・教職員	メンタルヘルスに関する冊子の発行

学生相談室の学生相談員が、相談室を出て授業を行うことの意義として、吉武（2010）を参考に次の5点が考えられる。

- ①臨床心理学の専門家として、大学をよく知るものとしての視点で話ができる。
- ②より多くの学生と学生相談員が会う機会となる。
- ③大学として環境調整や対策に取り組むべき学生の問題に気づくことができる。
- ④授業を通して、学生の学生生活への適応や課題への取り組みを援助できる。
- ⑤授業によって、学生の学生相談機関への敷居を低くする効果がある。

さて、調査対象となった大学には、兼任および非常勤の学生相談員が合わせて3名いる。それぞれ、授業を担当していたりしていなかったりとまちまちである。この3名の学生相談員および学生相談室について、大学に所属して間もない新入生の認知度を調査することで、学生相談員が授業を担当することが、ある大学の新生が学生相談室や学生相談員をどの程度認知しているのかということに影響するかを検討することを、本研究の目的とする。

## Ⅱ 方法

### 1. 調査時期

2015年7月。

### 2. 調査方法

新入生全員が必修の授業中に15分ほどを用いて調査の説明を行い、その場で配布・回収した。調査回収率は100%、有効回答率は99%であった。

### 3. 倫理的配慮

調査時に、研究の目的を説明し、匿名性の保護について、質問紙が無記名回答であり記入後のデータの保護が徹底されることを伝え、質問紙では個人的な状況や気持ちについて尋ねているがどの質問にも正しい回答はなく思ったままを率直に答えて良いこと、答えたくない項目には答えなくて良いこと、さらに成績評価には影響がないことについて口頭及び書面で説明し、質問紙の回答をもって研究の同意とした。

### 4. 調査対象者

医療系大学の1年生243名（男子99名、女子144名）、平均年齢18.5歳（SD=0.95）であった。

### 5. 調査内容

質問項目は次の通りであった。

本学に学生相談室があることを知っていますか？（はい・いいえ）

→「はい」と回答した場合、どうやって知ったかを教えてください。（自由記述）

学生相談室の場所を知っていますか？（はい・いいえ）

→「はい」と回答した場合、どうやって知ったかを教えてください。（自由記述）

学生相談室には、A相談員、B相談員、C相談員の3人の相談員がいます。この3人の相談員のことを知っていますか？

→「はい」の場合、どうやって知りましたか？（自由記述）

学生相談室の相談員に会ったことはありますか？

→「はい」の場合、どこで会いましたか？（自由記述）

3名の学生相談員のプロフィールは次の通りである。

A相談員：非常勤。週2日勤務。授業担当なし。

B相談員：非常勤。週1日勤務。全学科の教養科目のゲストスピーカー担当有。

C相談員：兼任。相談員は週2日だが、大学には週4日勤務。全学科の授業担当有。

### Ⅲ 結果

結果の分析のうち、数値の処理はIBM SPSS Statistics 20.0を用いた。自由記述の処理は、KJ法（川喜田,1967）<sup>6)</sup>を参考にカード化して分類した。

#### 1. 学生相談室があることを知っているかどうか

学内に学生相談室があることを知っていた学生は88名で、有効回答者全体の36.4%であった。

自由記述には80名が回答した。それらを内容別に分類すると、9つの小カテゴリに分類できた。具体的には、「オリエンテーション」（入学時の大学説明の時間）の20件、「誰かから」（具体的には特定できないが、誰かが言っていた）の14件、「授業」（相談員が担当する授業中のアナウンス）の13件、「教員」（担任等の学内の教員から聞いた）の10件、「学校説明会」（入学前の学校説明会でのアナウンス）の8件、「シラバス」（学生便覧兼シラバスに載っていた）の5件、「偶然通りかかった」（別の所に行く途中にあった）の4件、「学内の掲示」（学内の地図など）の3件、「友人」（友人に勧められた）の2件、「最初から知っていた」の1件であった。

9つの小カテゴリは、その意味内容から4つの大カテゴリにまとめることができると考えた。具体的には、「オリエンテーション」「学校説明会」「シラバス」「学内の掲示」をまとめて【大学の公式アナウンス】、「授業」と「教員」を【個々の教員の努力】、「誰かから」と「友人」を【非公式の情報】、「偶然通りかかった」はそのまま【偶然通りかかった】とまとめた（表2参照）。

表2 学生相談室を知った理由

大カテゴリ	小カテゴリ	件数
大学の公式アナウンス	オリエンテーション	20
	学校説明会	8
	シラバス	5
	学内の掲示	3
個々の教員の努力	授業	13
	教員	10
非公式の情報	誰かから	14
	友人	2
偶然通りかかった	偶然通りかかった	4

## 2. 学生相談室の場所を知っているかどうか

学生相談室が学内のどこにあるかその場所を知っていた学生は22名で、有効回答者全体の9.1%であった。自由記述には20名が回答した。それらを内容別に分類すると4カテゴリに分類できた。

具体的には、「偶然通りかかった」（別の所に行く途中にあった）の10件、「学内の掲示物・配布物」（学内の地図やシラバスなど）の5件、「オリエンテーション」（学校説明でのアナウンス）の4件、「教員」（担任等の教員から聞いた）の1件であった。

## 3. 各学生相談員の認知度

3名の学生相談員を知っているかどうかについては、まずA相談員を知っていた学生は1名で、有効回答者の0.4%であった。次に、B相談員を知っていた学生は49名で、有効回答者全体の20.5%であった。最後に、C相談員を知っていた学生は215名で、有効回答者の88.8%であった。

自由記述を見ると、B相談員を知っている理由に回答した学生は46名で、全員が授業のゲストスピーカーで来たことを挙げていた。C相談員を知っている理由に回答した学生は197名で、全員が「授業を担当していること」を挙げていた。

## 4. 各学生相談員に会った経験

3名の学生相談員に会ったことがあるかどうかについては、まずA相談員と会ったことがある学生は1名で、有効回答者の0.4%であった。次に、B相談員に会ったことがある学生は47名で、有効回答者全体の19.9%であった。最後に、C相談員に会ったことがある学生は204名で、有効回答者の85.0%であった。

自由記述を見ると、B相談員にどこで会ったかを回答した学生は39名で、38名がゲストスピーカーで来た授業を挙げていた。そして、1名が学内で出会ったと答えていた。C相談員にどこで会ったかを回答した学生は172名で、そのうち4名が2つ回答していた。内容を分類すると、「担当する授業」が168件、「学内」（食堂やトイレ）が5件、「大学までの乗り合いバス車内」が2件、「入試」が1件であった（表3参照）。

表3 学生相談員にあった経験とその場所

相談員	会った経験がある学生	会った場所	件数
A相談員	1		
B相談員	47	ゲストスピーカーで来た授業	38
		学内	1
C相談員	204	担当する授業	168
		学内	5
		乗り合いのバス車内	2
		入試	1

#### IV 考察

個々の相談員を知っていることの全回答と、どこで会ったかということについてのほとんどが、授業を通して知ったというものであった。C相談員には担当する授業があり、B相談員はゲストスピーカーを務める機会があった。つまり、吉武（2010）の指摘の通り、授業が学生との貴重な接点となっていると言える。このため、相談員が授業を担当する機会を今後も積極的に考えていく必要があるのではないかと考える。

ただ、今後は田中（2015）を参考にしながら、授業以外の接点を作るために、学生相談室および学生相談員からの発信を増やしていく必要があるかもしれない。

例えば、自由記述の内容から、学生相談室という機関があることは、オリエンテーションや掲示物のような【大学の公式アナウンス】や、【個々の教員の努力】によって知らされているケースが多いことが分かった。しかし、学生相談室の具体的な場所を知ったのは、「偶然通りかかった」が最も多く、どこにあるかまでは具体的に知らされていないことが多いのではないかと考えられる。さらに、学生相談室の認知率も三分の一強であり、「学生相談室について思いつくことを自由に書いてください。」という質問の回答者のうち25%が、学生相談室で聞いてくれる相談内容や相談室の場所を知らなかったため、アナウンスをする余地があるものと考えられる。つまり、学生相談室のアナウンスは、その存在だけでなく、具体的な場所（例えば、何階の何の近く）ということまで詳細に行う必要があるものと考えられる。

また、本研究でも少数ながら学生相談員と会った場所に、食堂等の校内の設備を挙げている学生もいた。このため、各学生相談員が相談に支障が出ない形で校内を巡り、場合によっては気になる学生に話しかけてみるようなアプローチも、アウトリーチ活動の一つとして検討する価値があるかもしれない。

最後に、本研究は、調査対象の大学の1年生に対してのみ行った調査によるものである。大学に慣れない新生が、学生相談室および学生相談員にアクセスする方法を探り、学生支援を充実させるための情報を得る価値があったと考える。その上で、今後は、2年生以上の学生の事情も調査して、その内容を新生が学生相談室および学生相談員にアクセスする方法に活かせるかどうか検討できればと考える。

## 謝辞

今回の調査票に回答してくれた学生の皆様に感謝いたします。

## 文献

- 1) 齋藤憲司 (2010) 学生相談の理念と歴史. 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編. 学生相談ハンドブック 学苑社. 10-29.
- 2) 鳥山平三 (2006) キャンパスのカウンセリングー相談事例から見た現代の青年期心性と壮年期心性ー風間書房
- 3) 田中理恵 (2015) 年間行事を活用した学生相談室のアウトリーチ活動. 日本学生相談学会第33回大会発表
- 4) 高岡昂太 (2011) アウトリーチ. 日本心理臨床学会編. 心理臨床学事典. 丸善出版. 636-637.
- 5) 吉武清實 (2010) 学生に向けた活動1ー授業への取り組みー. 学生相談の理念と歴史. 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編. 学生相談ハンドブック. 学苑社. 168-184.
- 6) 川喜田二郎 (1967) 発想法 中央公論新社

(平成27年11月24日稿)

査読終了日 平成27年12月16日